



TITLE:

静脩 Vol. 23 No. 2 (1986.12) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 23 No. 2 (1986.12) [全文]. 静脩 1986, 23(2)

ISSUE DATE:

1986-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65986>

RIGHT:



静脩

1986年12月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 23, No. 2

昭和61年8月24日から29日まで国際図書館連盟 (International Federation of Library Associations and Institutions : IFLA) の大会が東京で開かれた。

このIFLAというのは、1927年に図書館人の国際組織としてエジンバラで創設されたもので、現在本部はオランダのハーグにある。IFLA大会はこれまで欧米各国の持ち廻りで毎年開かれてきた。1980年になって欧米以外では初めての大会がマニラで行われたが、今回のIFLA東京大会はIFLA 60年の歴史上、アジアで二番目の大会ということになる。

大会は「21世紀の図書館」をメインテーマとし、さらに「ニューメディアの影響」、「図書館サービスの变化」、「情報利用における国際協力」など10項目をサブテーマとして取り上げ、「史上最多の63カ国、約2,000人」(8月30日付、朝日新聞)の参加者が、41分科会に分かれて、世界の図書館という視点から図書館の活性化について意見交換を行い、発表された論文は180、うち日本人の論文は約50ということである。

このような規模の大きさもさることながら、今回のIFLA東京大会の最大の意義は何と云っても日本で初めて開催されたということであろう。このことはアジア・アフリカ諸国からの参加が全体の三分の一と『異例の多数を占めた』という新聞報道にも表れているが、一方、日本人参加者側からみてもこの大会を通じて各国のたくさんの図書館人との交流の様態を伝聞し、また、そこで生まれた外国の人達との人の輪をさらに国内でのサークル作りまで発展させている例をみるにつけてIFLA東京大会がわが国図書館人に与えた刺激は決して小さいものではなかったと評価される。

本学の図書館関係者からも何名か参加されたが、これを機会にIFLA特集を組んだ次第である。

イフラ(国際図書館連盟)東京大会に出席して

東南アジア研究センター 北野康子

マニラ大会(1980年)以後の日本の図書館界にとって、「IFLA まであと〇〇日」というのが、スローガンみたいなものだったから、マスコミで、東京大会の成功が伝えられると、組織委員会はじめ、関係者はほっとされたと思う。高い参加費であったが、円高の日本へ来てくれた外国人の

事を考えて我慢する。8月21日、22日のプレコン(24日からの本会議の前にいくつかのセミナーが催された。このセミナー期間をさす)から28日のツアーまで、仕事の関係上、アジア、東南アジアに関するプログラムが中心となった。

8月24日(日) 登録。

プレコンの後、横浜の友人宅に泊ったので、東京へ戻って登録のみ。富士山のマーク入りのバッグを貰う。プログラムを取り出してスケジュールを組む。同じ時間帯に興味のある分科会が重なるのがある。

8月25日(月) 部会。開会式。全体会議。歓迎レセプション。

会場で、記念切手を先ず買う。今年のクリスマス・カード用にする。仏教大学や、京都と大阪のアメリカン・センターの人達の顔を見る。午前中書誌調整部会に出席。田辺広氏と、マレーシアの Wijasuriya 氏の発表を聞く。ここは、同時通訳。仏教大学の人達と昼食後、歩いて開会式場の国立劇場へ行く。2, 3分遅れたので、もう雅楽が始まっていた。皇太子殿下夫妻着席。壇上のスピーチは、予定より早く進行し、全体会議となる。シンガポールの国立図書館長の Mrs. Anuar を初めて見た。いつも Exchange List を送って来る所だ。会場が満員で、1日のみの参加者は入れなかったそうで、気の毒だった。

次のレセプションの会場、ホテル・ニュー・オータニまでぞろぞろ歩く。途中、プレコンの発表者の1人だった、マレーシアの著名なライブラリアン、Lim Huck Tee 氏と話をした。もう1人のマレーシアの人は、東京が暑いと参っている。汗まみれになって気持が悪いらしい。この大会には早く申込み、自費で支払ったのに、JTB は高いホテルしか教えてくれなかったと言う。私は安い所に泊っていますと言う。彼は、暑い暑いと繰り返して、ホテルへ着くと、Gentlemen を探してダッシュした。国立劇場の出席者が、どっとホテルに着いたので、クロークの前にずらりと行列ができた。ここは、冷房がよく効いていないのでとても暑い。あのマレーシア人は、また Gentlemen へ戻るのではないかと心配した。やっとバッグを預けて、「鶴の間」に入る。1000個以上の同じバッグを預かったに違いないクロークに同情する。この数では、さしもの大広間も満員となる。料理を前に、マイクの調子が悪くて、ゲー会長や鈴木知事の話は聞こえない。日本のテクノロジーはどうしたか。料理はおいしかった。パパイヤのような

高価な果物も出た。桃もおいしい季節である。参加費4万2千円を取り戻すべく人々が殺到した筈であるが、結構満足したのは、量もあったに違いない。タイの女性に「そば」を取ってあげた。一口の後の顔つきでは、気に入っては貰えなかった。それでも、「すし」の板前の前にこれだけ外国人も列を作るようになった。フィリピン大学のライブラリー・スクールのディーンである Mrs. Vallejo と、2年程前の東京の東洋学会で会って以来出会う。タイのチュラロンコン大学のライブラリー・スクールのディーン、Dr. Minaikit とも話をする。この人も女性。今回はシンガポールの Anuar 館長のみ出席だったが、タイとインドネシアの国立図書館も、女性の館長である。

8月26日(火) 分科会。Asian Night。

午前中は、アジア・オセアニア地域活動分科会出席。ここは逐次通訳。マレーシア国立図書館の Wijasuriya 氏と、マレーシア・ゴム研究所の Soosai 氏および私の属する「アジア資料懇話会」の代表幹事である金子量重氏の発表。Soosai 氏は、IFLA のアジア代表としての15年間の地位を辞される事になった。拍手をして労をねぎらう。Soosai 氏から AFLA (Asian Federation of Library Associations) の提案がある。資金や援助が必要である。そういうお金は出せない。オーストラリアの人が、きっぱり言う。金子氏が発言される。お金が無くてもできることから始めようではないか。図書館の南北問題となってしまった。南の人達にとって、東京へ来るのがいかに大変であるか。かと言って、日本は金の成る木でもない。結論は出ない。昼食は、青山学院の食堂で、ハワイ大学で仕事をしている日本人と。彼女とは、プレコンで出会って、よくいっしょに食事をした。午後は、先ず書誌分科会。アメリカ人と、マレーシアの Lim 氏。彼は、プレコンの他にここでも発表。次に、情報技術分科会。21日と22日のプレコンのまとめと、東芝の人の光ディスクについて。

宿に戻って、インドネシアのバティックで作った服に着替えた。レセプションは「平服」と書いてあったので、今度しか着る機会がない。せっか

く持って来たのに。「アジア資料懇話会」の東京の人達が、Asian Nightを開こうと準備して下さった。近くの南青山会館に、アジア諸国の人達が集まった。食べたり、歌ったり、お土産品をあげたりして、9時頃まで過した。国際交流委員長の今まど子教授も来て下さった。

8月27日(水) 分科会。展示会。

Japan Night。

午前中は2回目の地域分科会。マレーシアとタイの女性2人の発表。いずれも機械化の問題。発展途上国の適正技術にも関係がある。この後で急いでホテル・ニュー・オータニへ行って、まだ見ていない展示を見る。Kraus Reprintの人から部厚いカタログを貰う。この会場は最終日なので、IFLAのマーク入りの記念品が安くなっている。職場の人への記念に、ペーパー・マークをたくさん買う。青山会場は、まだ同じ値段である。東京の人にホテルの食堂で、昼食をごちそうになる。また青山学院へ戻って、「書誌とアジア研究」というテーマの書誌分科会に出席。3人の発表が代読で驚いた。先ず、ソ連の人が、ロシア語のペーパーを読んだ。出席者は、英語か日本語を読んでいる。英語の質問が出る。通訳無しなので、ソ連からの出席者らしい人が通訳して、やっと代読の人に意味が通じる。ヤヤコシイ。2番目は中国人。これも代読。ただし英語。3番目の、アジアに関するPh.D.論文についての発表者、アメリカ人のShulman氏は、「Doctoral Dissertations on Asia」の編集者である。この人の発表が聞きたかったのだが。この後、CONSALという所に出席。フィリピン大学のVallejo教授が、来年2月にマニラで開かれるCONSAL (Congress of Southeast Asian Librarians) についての紹介をされた。ここは論文の発表は無し。Anuar 館長のCONSALについての発表は、ここの方が良かったのでは。少人数だったので、入って来たカメラウーマンに何枚も写真が撮られた。最後の日に、アジアの人達の写っている写真を10枚ばかり買った。後日、Asian Nightの分もいっしょに国別に送ってあげたら、とても喜ばれた。

外国人にどんなものを見せるか、野次馬根性で

Japan Nightに行った。ホスト側だから、隅の方で遠慮して観た。東京へ来る国際会議の参加者は、自動的にここへ送り込まれるのか。パッケージでないと高くつくであろうけど。ファッション・ショー。日本のデザイナーさん、ヨーロッパでがんばってますから。日本の女性は、あんなに颯爽とは歩きませんね。狂言の「棒縛り」は分かりやすかったと思う。酒呑の話は万国共通だから。「鼓童」の太鼓は好評だったようだ。日本の伝統芸術は、デリケートでシブくてと思っていた人には、あのダイナミズムは意外であったろう。

8月28日(木) 国立国会図書館見学。

アジア資料課の人が、特に案内して下さいと言われるので、仏教大学の人と2人で行った。新館では、閲覧を委託された人達が、開館を前に、本番の練習をしていた。実際にうまく行くといい。最後に青山会場へ戻って、申込んでおいたペーパーを受取った。後でそのひとつが、1番違いである事に気付いた。事務局に電話したら、正しい分が送られて来た。直ちにであったから感心した。

プレコンの事は、紙面が無いが、CJK (中国語／日本語／韓国語) 等の非ローマ字の機械処理についてであった。東南アジアについて言えば、タイ語や、マレーシアのジャヴィ (翻訳では、ジャワ語となっているが、誤りである)。などでは、ローマ字や、語の区切りの問題など、標準化の問題が大きい。韓国語の他に、日本語や中国語の分かる韓国人の女性が言われた。ローマ字は西洋人のためにあるのではないか。ISBDにはアジアの意見は反映していないのではないか。

ある職業が、専門職であるための条件のひとつとして、その職業の団体の活動や組織力が問われる。1927年以来、52回もの国際会議を開催したというIFLAの活動と組織力は、評価されてもよいと思う。高度情報社会の中で、図書館員に要求される知識や技術は何か、何を学ぶべきかを考えるきっかけに、今回の東京大会がなったことを望みたい。

イフラ東京大会見聞記

農学部 藤 本 哲 生

イフラ東京大会に行ってきた。イフラというのは国際図書館連盟のことで、その第52回大会に参加したわけです。それだけでなく人も多い東京に世界中（60数カ国）から、図書館人が集って一大祭典を開催したのです。いやそうだろうと、やや甘く考えて参加したのですが、実際はなかなかシビヤーでした。こういう大会は、つまるところスピーチが集中したもので、それを聴いて触発されたり、多くの人々と知り合いになるのが目的だと思うのですが、なかなか充実した実のある話しが聴かれ、非常に結構でした。

まず初日24日のことから始めましょう。10時から登録が始まりますので、9時すぎに宿を出て、会場の青山学院大学めざして、地下鉄銀座線表参道駅で降りて、地上に出ると私の前方に異国人（とつくにびと）が数人何やら「この方向で大丈夫かな」という不安げな風情をただよわせながら歩いています。ひょっとすると御同業人＝図書館人かなと横目で見ながら追い越して、大学の正門のところまで来ると、IFLA 関係の標識が一杯たててあり、その指示通りに行くと、登録センターです。登録はスムーズにいき、チケットと交換にバッグに入った関係書類一式をもらいました。名札（ネーム・タグ）が大切なもので、期間中ずっとこれを胸につけておかねばなりません。これがあれば、国立劇場での開会式にもフリー・パスですが、なくしたら、ダーメン・ヘレンとなるとおどされました。書類等は大会プログラム、参加者リストが主なもので、その他にもいろいろ入っていました。展示会レセプションは、ホテル・ニュー・オータニで夕刻6時半から始まり、展示会場と同じ場所ですので、展示を見学しながら歓談するわけです。慶応大の大沢典子さんの司会でレセプションは進行し、8時まででありました。挨拶の中で「今日の一般見学者はすでに1200人位

で、レセプション参加者が1300人位なので、一日の見学者としては従来のどの大会よりも盛況だ」ということでした。この展示会そのものについては別掲予定の記事によることにします。

約180の部会、分科会等がありますので、一人で参加できるのはごく一部ですから、京大参加者で手わけして各々自分の興味のある分野に限定し、発表のテーマ、発表者により選択しました。論文や著書でその名前を知っている人、例えばロバート・ヘイズのような人を特に選びました。

さて25日（月）午前中は、このヘイズさんの講演に行きました。ベッカー & ヘイズで有名な人で、私にとってはその著書『情報の蓄積と検索』が情報検索の世界へ導いてくれた人ですので、どういう顔をした人かと興味しんしんでした。眉毛の白い偉丈夫でした。彼は自分のペーパーが既に聴衆に配布されていると思ったらしく、それにコメントを加える形で話したいと切り出し、聴衆からもらっていないと異議が出、司会者からはすぐに配布する旨のアナウンスがあったにもかかわらず結局配布されず、なにかいらいらした雰囲気でした。同時通訳がついていますが、一方の耳では英語が、他方では日本語が同時にはいってきますと頭の中で混乱しましたので、無理をして英語だけで聴きました。彼の所属する UCLA の GSLIS（図書館学校）でのプロジェクトの説明でしたが、その調査研究成果が今後の図書館教育に及ぼす影響については触れられず、スピーチの題名から期待したほどのものではありませんでした。

午後2時から国立劇場において開会式と全体会議がありました。皇太子と同妃殿下が来駕されました。私は2階の3列36番という良い位置で両殿下の真正面でした。皇太子殿下の挨拶は実のあるもので、「日本は出版量が多い割に、図書館が発達していない。個人が自分で本を買うせいかもしれ

れないが、この大会を機会に……」と述べられました。全体会議のスピーチの第一は、学術情報センター長、猪瀬東大工学部教授の「学術情報システムー統合された情報ユーティリティへの挑戦」と題するもので、スライドを映しながら英語で発表されました。日本人の話す英語は割と聴きとりやすいものです。今、日本がめざしている統合された学術情報ネット・ワークの基礎になる考えが系統的に述べられました。雄大というのが印象です。他に2件の講演がありました。

この全体会議の終了後、場所をホテル・ニュー・オータニに移して、都知事招待の歓迎レセプションがありました。実に華やかなもので、音楽の生伴奏つきで、クラシックとジャズが交互に流れました。意外にもこのレセプションにも両殿下が出席され、外人は特に喜んでいました。私はこの場で、非常な幸運にめぐりあいました。西独のE・プラスマンさんに会えたのです。“Bibliothekswesen in der Bundesrepublik Deutschland” (2. Aufl.) の共著者の一人で、参加者リストにはその名前が載っていませんでしたが、この会場で何人かのドイツ人と話しをしていて、彼がこの会場にも来ていると知って驚きました。何人かが探してくれたのですが仲々みつからず、半分あきらめていたときにひょこっと会えて30分位おしゃべりをしました。彼の著書を独語で読んだと言うと喜んでくれ、彼が持って来っていた英訳本の目次を出して説明してくれました。私も目次に即して、図書館関係機関の説明を求めたりして、あっという間に時間がすぎ、明日又会おうと約束して別れました。21才の息子さんを同伴して来ているそうです。

第三日26日(火)は、昔とった杵柄というわけ、国際法律図書館協会 (IALL) I に出席しました。発表者が日本人の弁護士さんと最高裁図書館の小野孝正さんのを聴きました。2人共英語で発表されました。「日本法の解釈・運用—実務家の視点から」と「日本法の調査研究、書誌・索引」と題するものです。後者は日本法に関する欧文文献のリストを配布して、それに解題を加えるというものでした。その文献の中に京大法学部の

北川善太郎教授編の *Doing Business in Japan*, Vol. 1-10, 1980-1981, Mathew Bender 社刊が best book としてコメントされたのは嬉しかった。教授がこの本を編集されていた頃の御苦労を少しは知っています。又ポール・オイベルの *Das japanische Rechtssystemen*, 1979 も載っていて、彼が研修員として京大に居たころ知っていたし、今大阪ドイツ文化会館の館長として在日している旨きいてるのでなつかしい名前でした。この IALL I は一日中あるのですが、一日中つきあうわけにもいかず、席を移して、LIBER パネル・ディスカッションを聴きました。「英国の極東コレクション」と題して British Library の B. C. ブルームフィールドさんがまず話され、配布された資料そのままのスピーチで内容もきちっとしたものでした。次にスウェーデンの L. フレデリクソンという人が「スウェーデンの東アジア・コレクション」と題して話したが、猛烈な早口の英語でスピーチをし、その上配布資料には全然即さないもので、ところどころしか理解できなかった。最後に西独・国立プロイセン文化財団図書館のヘルガ・ドレスラーさんが配布された英文資料にのっとって話した。彼女はかつて京大文学部で野間光辰先生のもとで雨月物語を研究した女性で、ブロンドの髪とゲルマン人らしい雄大な体格をした日本語ペラペラの人です。「ドイツ連邦共和国の図書館に於ける東アジア書籍」と題して、歴史的概説と現状とをとうとうと述べ、さすがに途中で声がやや小さくなりましたがエネルギーな話しぶりでした。三つの発表の後で、Q & A があり、2番目のスピーチに質問や反論が集中した。私の後ろにいたフィンランド女性は、「あなたは国々の友好云云と言ったが、甘い。例えばロシアのツアーは征服の目的で東アジアの資料を収集した」旨の議論をふっかけ、発表者は閉口した風情でした。ローマ字翻字の問題にも反論があり、かなりはげしいやりとりがかわされ、予定の12時半には終了しませんでした。原語を付加すべしというのが反論のようで、発表者は、「ヨーロッパにはヨーロッパの立場があり、アメリカとは違う」旨答えていたようです。

私は1時に、昨夜約束したプラスマンさんと会い、食事に行きました。道中や食卓でもいろいろ話しをしました。3時からのカルトヴァッサーさんの発表を2人共聴く予定なので、それまでの時間、彼の著書 *Bibliothekswesen* について巻末の索引のアルファベット順によく分らない用語について質問しました。例えば *Bibliothekstantieme* という用語などは独和辞典などをひっくり返してもよく分らなかった言葉でしたが、彼に説明してもらってはじめて分かりました。順々にやったので、Fの途中までしかはかどりませんでした。

3時からの発表者カルトヴァッサーさんは、バイエルン国立図書館長というドイツ図書館界の大物で、その名前位は私も知っていました。配布資料は本文だけでも12枚あり、ゲートからの引用に始まり、ヒデルスマイヤーやウンベルト・エコーの文章が引用される格調高いものでした。「電子式データ処理時代における現代情報化社会の危機」と題するもので、「私は自分の呼び出した精霊をもはや退治できない。それをコントロールする魔法の呪文を忘れてしまったから」というようにならないよう、と情報化社会における危険について話された。コンピューター犯罪とかデータ保護のように今日すでに明白になっている個々の危険より、次の二つの包括的な危険について議論され、「情報の過剰生産による窒息」と「新技術による情報かくし」に分けて詳論がありました。要約するのはむづかしいので、これ以上は触れません。配布英文資料と申込んだ独語資料がありますので、関心のある方は私まで御照会下さい。

さて実質的な最終日(28日はツアー、29日は閉会式)である27日(水)は、収集・交換分科会Ⅱの西独 DFG のレオナードさんの「ドイツ学術振興会の出版物の交換—ドイツ連邦共和国における中心的な任務としての灰色および専門文献の収集に関する合理的プログラム」と題するスピーチを聴きました。ドイツの学振は日本のと異なり、はるかに大きな財政力をもった団体で、図書館活動にも関心が強く、大学図書館へも多額の援助をしています。自ら文献の収集にもあたっているのです。交換でなければ入手できない、いわゆるグ

レイ・リテラチャーには、私達も困っていますので、こういう機関があってその入手に努力しているのが、うらやましく感じられました。

ソニー社の宮岡千里さんの「光ディスクの図書館への応用」と題する発表を聴こうと会場にかけたところ、午後1時からに変更ということではがっかりしました。ペーパーは申込みました。

次に図書館史ラウンドテーブルに出、岡崎義富、河井弘志さんの発表を聴きました。

GID のワッテンバークさんのマンションでおしゃべりをするから来いと急に誘われて、予定していた午後1時からの大学・調査図書館分科会Ⅰの松村多美子教授と根岸正光教授の発表は聴けませんでした。私達に一番関心のあるテーマですから他の京大からの参加者が聴いてくれたことと思います。ワッテンバークさんのところで、ドイツの図書館学や図書館事情に関心をもつ者が、情報交換のためのグループを作らないかという旨の提案があり、自己紹介やおしゃべりをしました。ドイツ側の出席者は、ワッテンバークの他、今日発表したレオナード、ドレスラー、アウグスブルク大学のF・フランケンベルガー、ケルン大学のプラスマンたちで、お互いに協力していこうと当然のこととなりました。ワッテンバークの発表「科学雑誌と電子出版物の動向」は聴きたかったので、会場に駆けつけました。ちょうど間に合いました。米国の現状、ヨーロッパの現状、日本の現状について要所をおさえた発表でした。日本の現状については、我々も知らないことが調べられていて、驚きでした。Q & A になって、司会者がいくらうながしても質問もコメントも出ず、「今晚の“日本の夕べ”に行きたくて、うずうずしているのでしょう」というユーモアある締めくくりの発言で、発表者に2度ほど盛大な拍手を送りました。

皆の期待通り、「日本の夕べ」(日本青年館で開催)はすばらしいものでした。特に鼓童の太鼓は大人気で熱烈な拍手でした。私もテレビで観たことがあるので、期待していたのですが、それ以上でした。こういうものは生にかぎります。迫力がピンピン心臓に響いてきます。構成も立派でし

た。小太鼓と大太鼓のアンサンブル、鬼太鼓の力強さ等、すばらしいの一語につきます。

この日で大会は実質的には終わったわけですよ

で、私の駆け足の見聞記もこれで終わらせてもらいます。なお一言、私達を参加させて下さった京大関係者の皆様にあつく感謝いたします。

イフラ東京大会「国際図書館情報総合展」を見て

数理解析研究所 隅 田 雅 夫

毎年8月国際図書館連盟の世界大会が北米、ヨーロッパを中心に開催されているが、今回初めて日本で（アジアでは2回目）開かれ、参加する機会を得たので、大会と並行して催された展示会「国際図書館情報総合展」について簡単に報告する。

この展示会は8月24日より4日間の日程で、会場はホテル・ニュー・オータニ、有料で一般にも公開されたが、4日目のニュースでは最終的に1万5千人をこえるだろうと言われるほどの盛況だったようだ。初日午後1時半からオープニングし、テープカットが行なわれた。（写真参照）

出展者はリストによれば約100社にもなり、そのうち4分の1が海外からのものである。図書の出版、印刷、取次などの各社、書店、古書店、図書館機器、マイクロ写真、コンピューター関連の技術やシステムのメーカーやディーラー、内外の図書館関係を含む種々の団体や協会とその広報機関など多岐にわたる内容で、そのほか実演を含む和紙の製造、和装本の修復、浮世絵版画の刷り工程など特に外国人を意識した出展もあった。

展示会では時間の制約もあり、情報処理技術や図書館システムを中心に見学した。したがってここでは他のことについてはふれていない。はじめての世界大会ということで、この分野での外国からの出展を期待していたが、国内取扱いのものを除けばわずかに2件、OCLCとCLSIであり、しかもCLSIはパンフレットの配布のみであった。OCLCでは、CJK (Chinese/Japanese/Korean) 端末による漢字処理の実演があり、他に東京、大阪でもシステムの説明会を開いている。

まず第一に印象に残ったものは、やはり国内で

一堂に会するのは初めてといわれたCD-ROMであろう。CD-ROMとは、レコード屋で売っているコンパクトディスク（CD）と同じようなもので、ディスク上には音楽信号ではなく、コンピューターで扱える文字などデジタルデータがはいっており、PC-9801などのパソコンに接続し周辺機器として使う。しかし、音楽を聞くのと同様、すでに入力済のデータを読みとるだけ（ROM: Read Only Memory）で、データの書きこみや修正は今のところできない。あの小さな円盤に550MBもの大容量（パンフレットによれば英和辞典100冊）をもっているうえに、複製の費用が安価なことから、オフラインデータベースや電子出版のメディアのひとつとして最近急速に注目をあびているものである。

今回も、百科事典、用語事典、職業別電話帳などのデータを検索していたが、前二者はすでに市販されている。さらに音声や映像とも組合せて、ひとつのCD-ROMにしたものも試作品として紹介されていたが、教育用などに期待されているという。なお、CTS方式（Computer Typesetting）



で編集された本は簡単に CD-ROM 化でき、また 5, 6 年前から本の編集にはほとんどこの CTS 方式が用いられているとのことだった。

CD-ROM でもっとも興味深かったのは、話に聞いていた LC-MARC の CD-ROM 版である。1 枚のディスクに 100 万件のレコードが入っており、著者や書名などで検索して表示し（デモではカードフォーム）、必要なデータは普通のハードディスクやフロッピーディスクに保存して、その後のデータ処理に使えるという。これは、われわれが大規模コンピューターでしかできないと考えていた MARC による目録作業を、パソコンだけで処理できることを示している。この LC-MARC の CD-ROM は、この展示会のために米国より借りてきたということだった。

次に特徴的だったのは、パソコン、ミニコンによる多くの図書館システムで、日本ではこの数年間で急増した分野である。それらをパンフレットによって列記すると、BOOK-MAN, LICS, LOOKS, LOOKS/U, ILAS, LIMS/PC, LMS, CALIS, MINI-DB II ライブラリアン、図書、CAPS 図書情報システム、IBM システム/38 図書館システムなどがあるが、すべて小規模、中規模図書館用で、多くのブースでカラフルな画面が目についた。なかに、FACOM 9450Σ の簡易言語 EPOACE で図書館システムを作成中だというソフトメーカーがあった。また、取次店が提供している図書の受発注システムも一部の図書館や書店で使われているという。

そのほか、図書館関係でいえば、光ディスク、種々のデータバンクやデータベースサービス、大規模図書館システムや学術情報センターなどのネットワークシステムが展示されていたが、出展に参加していないところもあり、例えば図書館システムの大手メーカーでは、富士通、日本電気、三菱電気などの展示は見られなかった。

最後に、印象的だったことを 2 点だけあげてみたい。ひとつは、現在日本 IBM が早稲田大学

で開発中の図書館システム—DOBIS/LIBIS/WINE システムで、このシステムではとくに図書館利用者のための画面が用意されていて、目録検索のほかに自分の貸出記録の照会や、図書館員へのメッセージの入力ができるようになっており、また留学生用に複数言語が選択できるようになっている。簡単なことだが、図書館システムの設計思想について再考させられた思いがした。もう 1 点は、データベース振興センターが三菱総合研究所に委託して図書館間相互貸借システムを開発中とのことで、具体的な内容はわからなかったが、図書館活動が館内システムではなく、こういう形で、しかも民間の機関によって取り上げられるのは、国内でははじめてではないだろうか。

以上、展示会の一部、それもコンピューター関係に限定し、報告というよりも個人的な印象を述べたものになった。大会自体との関連でいえば、こうした情報処理技術の発展に、図書館がどう対応していくのか。これは、国立劇場で行われた大会開会式で永井大会組織委員長が述べたところによれば、「21世紀の図書館」（大会メインテーマ）に向かつての二つの課題のうちのひとつになっている。（ちなみに、今ひとつは「第3世界（発展途上国）の図書館振興」で、これも今回の IFLA 大会参加でいろいろ考えさせられた）。また、大会での発表や発言の中でも、光ディスクなどの新しい技術への関心は総じて高いものであった。図書館界は、先進国、発展途上国を問わずいろいろな意味で、今までにはなかった新しい「産業革命」の時代にはいっているのかもしれない。

最後に、蛇足になるかも知れないが、詳細なコンピューター導入計画の発表のなかで、ある発展途上国の代表者の言った次のような言葉が、いまでも強く印象に残っている。「われわれの計画はまだ理想にすぎないが、細心の注意を払って立案しなければならない。われわれには失敗や試行錯誤は許されないのだから」。